様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　２５年　６月１３日現在

機関番号：１６１０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010 年度～2012 年度
課題番号：２２５２０６４０
研究課題名（和文）　小学校外国語活動における「絵本」の活用の類型化と運用方法に関する実践的研究
研究課題名（英文）　Categorization and Application of Picture Books in Elementary School Foreign Language Activity
研究代表者
畑江　美佳（HATAE MIKA）
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号：20421357

研究成果の概要（和文）：小学校外国語活動の最も重要な目標の一つは「コミュニケーション能力の素地をつくる」ことである。絵本を教材として利用している授業や，活用法について話題になることも多い。教員は授業での経験からその効果について少なからず実感してはいるが，小学校での絵本の活用実態についての詳細は調査されていない。本研究では，学習指導要領における指導目標と絵本活用との整合性を検討し，教員へのアンケート調査から現在の絵本活用の実態を明らかにする。そして児童の発達段階に合わせた積極的な絵本活用方法を提案する。

研究成果の概要（英文）：To form the foundation of pupils' communication abilities is one of the most important objectives in the elementary school English activities.　Although some teachers and researchers find that using English picture books is effective for pupils, its position in English activities has not been fully discussed.　Under these circumstances, this research has attempted to reveal the actual conditions of using picture books and to show that using them would accord with the objectives in the government curriculum guidelines.　Then it makes some suggestions on the effective use of picture books.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学　外国語教育
キーワード：早期英語教育，小学校英語教育，外国語活動，英語絵本

１．研究開始当初の背景

2011 年度からの外国語活動必修化に際し，活動目標や活動内容が学習指導要領によって明確に示され，小学校 5,6 年生で週 1 回実施されることになった。文部科学省作成の『英語ノート』や『Hi, friends!』の配布により，教材も統一化されたが，必修化以前は，地域ごとに豊かな英語活動を目指して活動の内容や教材・教具の研究を行い，それぞれに工夫した取り組みが繰り広げられていた。その中の一つに，「絵本」の活用が含まれていた。しかしながら，活動に使用する絵本の選本，活動頻度，活動時間，活動内容及びその効果など，実際には調査されていないのが現状であった。「絵本」を外国語活動に導入することによる効果は少なからず論議されており，その活用法を具体的に研究することは，これからの小学校英語教育にとって有用

と考えた。

２．研究の目的

絵本を活用した英語活動がコミュニケーション力や表現力を養うのに適していることや，外国語活動の教材としても教授法としても有効であることを示唆する研究は少なからず存在する。しかしながら，その実践研究はまだ断片的に発表されている段階であり，小学校英語活動における絵本活用の位置付けや系統立った活用方法は明確にされていない。この点を明らかにし，絵本活用を正しく理解し，適切な方法で活動に組み込むことは，より豊かでより実りある英語活動に発展させていくためには急務であると考える。

３．研究の方法

1. 小学校教員を対象としたアンケート調査をもとに，絵本活用実態を明らかにし，学習指導要領との整合性及び活用の妥当性を明らかにする。
2. 小学校での絵本活動の実践を通して効果的な「絵本」の運用を検討する。
3. 活動に相応しい良書の収集及び学年及び活動内容に準じて類型化を図り，その運用法を検討する。

４．研究成果

(1)小学校教員アンケート調査

平成 23 年 8 月から 9 月にかけて，新潟県糸魚川市，山形県鶴岡市，石川県かほく市及び津幡町（以後，かほく・津幡）の小学校教員に「公立小学校外国語活動における絵本の活用実態に関するアンケート調査」を実施。回答者は平成 22 年度に担任クラスを持っていた教員である。各小学校へ調査用紙（表 1）を配布し，239 枚の無記名による回答を受け取った。

本研究ではアンケートの質問項目のうち，III の絵本に関する質問中，①活用の有無，②活用頻度・時間・冊数・回数，③絵本に対する児童の興味・関心，④絵本活用の利点，⑤絵本活用の問題点，⑥絵本を活用しなかった理由，の 6 項目について検討した。

①絵本活用の有無（図 1）

活用していると答えた小学校教員は全体の 37%，約 3 分の 1 であった。さらに，活用していると答えた教員を地域別にみると，糸魚川市が 25.0%，鶴岡市が 22.7%，かほく・津幡は 64.6%だった。絵本の活用には地域によって大きな差が認められた。かほく・津幡市での活用率が高かった理由には，かほく市の英語活動に対する長年の取り組みが関連している。

表１　調査用紙

【質問項目】
I Q1 性別
Q2 年齢
Q3 平成22年度までの英語活動指導年数
II Q1平成22年度の担任学年
Q2同年度のクラス人数
Q3同年度の学年あたりの活動年間時数
Q4同年度の主な活動形態
Q5同年度の主な活動内容
Q6同年度の主な使用教材
Q7同年度の主な使用機器
III Q1絵本活用の有無（有→Q2～Q7 無→Q8）
Q2絵本の活用頻度・時間・冊数・回数
Q3絵本の活用方法
Q4絵本に対しての児童の興味・関心
Q5今までに使用した絵本名と学年
Q6絵本活用の利点と問題点
Q7推薦絵本と理由
Q8絵本を活用しなかった理由

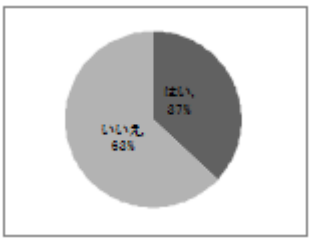

図１　絵本活用の有無

②活用頻度・時間・冊数・回数

絵本活用教員によると，年間総授業数のうち 1 回の絵本活用が 38.6%, 2 回が 25.3%で，全体の 6 割を占める。活用時間は 45 分の授業時間中 5 分までが 32.9%，10 分までが 50.6%で，全体の 8 割以上が，活動中 10 分以内である。年間使用絵本数は, 1 冊が 38.4%, 2 冊が 34.2%で全体の 7 割を占める。1 冊の絵本を何回使うかに関しては，1 回が 81.4%と最も高い。総じて，絵本を活用して活動を行う場合，年間 1～2 回，1～2 冊を，授業の 5～10 分，単発で扱うという実態が浮かび上がってくる。例えば，動物を扱ったレッスンの最後に，動物の登場する絵本を選んで読み聞かせる，といった活用が主であると思われる。つまり，同じ絵本を繰り返し用いて英語表現の定着を図る，系統立ったカリキュラムの中に組み込む，といった継続的・計画的な活用は行われていないといえる。

③絵本に対する児童の興味・関心(図 2)

児童の興味・関心について，5『非常にある』，4『かなりある』，3『ある』をひとまとまりとしてみると，「楽しく聞けた」は 94.3%に上る。以下も同様に，「絵本の内容を理解した」が 80.5%，「異文化や外国の習慣に興

味を持った」が 59.3%，また，「コミュニケーションを図ろうとする態度を養った」は 49.3%である。一方，4 技能のうち，「楽しく聞けた」が 94.3%と最も高い興味・関心を表しているのに対し,「楽しく話せた」が 32.5%，「単語などが読めた」が 17.9%，「単語などを書けた」が 2.4%に留まる。大島(2011)によると，絵本を使った指導法には，1）読み聞かせる，2）一緒に読む，3）ひとりで読む，という 3 段階がある。本調査では，大部分の絵本活用が，教員による「読み聞かせ」という第 1 段階に位置していることが明らかにされた。これらの結果から，実際の絵本活用は，学習指導要領の目標や指導内容に一致した形で行われていることがうかがわれる。

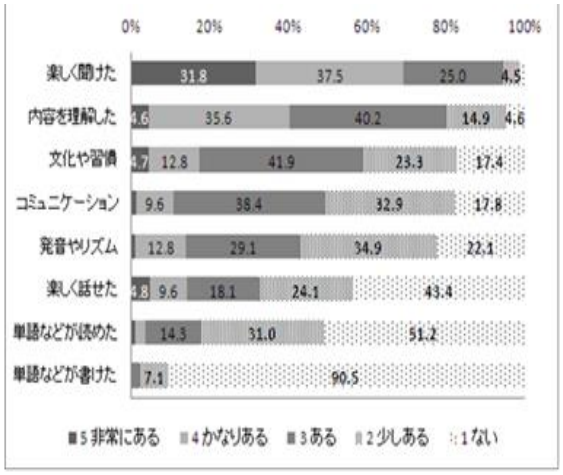

図２　絵本に対する児童の興味・関心

④ 絵本活用の利点

教員が挙げる絵本活用の利点は，「推測して内容を理解できる」，「親しみやすく興味や集中力が持続する」，「繰り返しが多くリズムや表現が身につく」，「外国の文化や習慣に親しむことができる」等であった。最も回答が多かったものは「推測して内容を理解できる」ことである。これは，佐藤他(2009)の「推測する力を養う」との見解とも一致する。太田(2012)は，多少わからない表現に出合っても，意味を推測しながら聞き続けようとする意欲や態度が小学校外国語活動に期待される成果であり，この「なんとなく理解できる」力が重要であるという。絵や読み手の声の調子等を手がかりに，話の展開を推測しながら聞き続けることができるのは，絵本ならではの効力であるといえる。

⑤絵本活用の問題点

活用している教員が抱える問題点は，「理解度に個人差があり，難しいものもある」，「指導技術に不安がある」，「大型絵本の購入や，選本が難しい」，「活用方法や他の活動との繋がりが分からない」等であった。選本や環境の整備，指導技術の習得やカリキュラムとの関連性に関する問題が挙げられている。また，活用しなかった教員は，「必要性を感じなかった」，「時間的余裕がなかった」，「選本や活用の仕方がわからなかった」，「読み方に自信がなかった」と言う。絵本に対する認識不足，絵本の入手問題，指導技術の未習得が主な理由であり，これらは活用教員の抱える問題点とも重複している。絵本の購入や指導技術の問題等は，教員個人での解決は難しく，学校や自治体による働きかけや対応が求められる。また，読み方に不安のある教員は，活動や児童の実態に合わせて選んだ絵本を ALT との活動日に読んでもらうように準備することや，事前に音声を録音させてもらうことも一案である。

以上の考察から，外国語活動における「聞く活動」，「異文化理解教育」，「コミュニケーション能力の育成」等の点において，絵本の活用には効果があると考えられ，絵本活用を妥当とする理由を次のようにまとめた。

1）繰り返し用いても子どもが飽きないため，単語や表現が無理なく身につく。
2）日本語で説明しなくても内容から推測して，英語の意味を理解することができる。
3）英語の自然なリズムや抑揚を真似て，気持ちのこもった英語を話すことができる。
4）外国の文化や習慣の違いや共通点に気づくことができる。
5）既習の単語や表現が複合的且つスパイラル式に身につく。

しかし，絵本の活用を外国語活動の中に定着させるためには，次の 3 点の検討が必要である。

1）学年や活動に合わせた選本から活用法までの系統立ったカリキュラムの作成
2）小学校・自治体等による，絵本導入の共通理解と絵本の購入及び環境整備
3）教員に対する絵本の指導技術研修

(2)絵本活動の実践

①実験の枠組み

2013 年 1 月の連続する 4 回の外国語活動時，授業の始めの 5 分間で英語絵本の読み聞かせをした。被験者は鳴門教育大学附属小学校の 5 年生 112 名，6 年生 109 名であり，各 3 クラスを A 群：「読み聞かせ」，B 群：「読み合い」，C 群：「なぞり読み」，の 3 群に分けて実験をした。A 群の「読み聞かせ」とは，教員が大型絵本を読み児童がそれを聞く活動であり，B 群の「読み合い」とは，教員の読み聞かせ中，絵本の中のある 5 ページ分のみ，教員と一緒に声を出して発話する活動であり，C 群の「なぞり読み」とは，児童一人一人に小型の絵本を配り，教員の読み聞かせ中，自分の絵本の文字の部分を指でなぞりな

がら，教員と一緒に声を出して発話する活動であり，文字が介在した。

絵本は Eric Carle の “*The Very Hungry Caterpillar*” を使用した。この本を選択する理由は，1）読んでストーリーを知っている子どもが多く，読み聞かせの一歩を踏み出すのに最適であること， 2)「食べ物」「曜日」「数」「蝶の一生」など子どもがなじみやすい題材であること，3）繰り返しの表現が多く，平易でリズミカルな英語で構成されていること，である（外山，2010)。練習に使った 5 ページは以下である。

(1 ページ目) On Monday he ate through one apple. But he was still hungry.
(2 ページ目) On Tuesday he ate through two pears, but he was still hungry.
(3 ページ目) On Wednesday he ate through three plums, but he was still hungry.
(4 ページ目) On Thursday he ate through four strawberries, but he was still hungry.
(5 ページ目) On Friday he ate through five oranges, but he was still hungry.

②調査

I. 調査用紙による英語活動・学習への意欲・態度面の調査，II. リスニングテストによる語彙習得の調査を 1 回目の絵本活動直前に「事前テスト」として実施し，4 回目の絵本活動終了から 7 日後に「事後テスト」を実施した。III.は，スピーキングテストで，練習した 5 ページ分の絵本を見ながら（文字あり）発話させ，計 60 語彙のうち発話できていた数を数えた。I. の調査は，1 回目の読み聞かせ前に，教室で一斉に英語活動や絵本に対する興味・関心度を調査紙への記入方式で行う。質問内容は，英語や絵本への興味度，英語塾等への通塾の有無，使用絵本を日本語で読んだことがあるかどうか，について質問した。「事後テスト」では上記に加えて，絵本活動に関する質問を加えた。II. の調査は，CD 音声によるリスニングテストを実施した。リスニングテストで用いる語彙 10 問は lollipop, sun, cupcake, pickle, leaf, watermelon, cocoon, plum, moon, caterpillar であり，『Hi, friends!』に出てこない語彙をバランス良く選択した。III.は，「文字を読みなさい」と言わず，「声に出して言ってください」と指示した。

③調査結果

調査結果では，「絵本を読むのは楽しかった」に対して，「楽しかった」と「とても楽しかった」は, 5 年 A 群 64.8%, B 群 75.0%, C 群 44.1%だった。6 年 A 群 67.5%, B 群 63.1%, C 群 30.5%だった。また，リスニングテストでは，全ての群で語彙の伸び（5 年生平均 9.39, 6 年生平均 9.55）があったが，各群の間には有意差がなかった。一方，スピーキングテストにおいては，5 ページ分の 60 の語彙習得に対して，5 年 A 群 34.5%, B 群 35.0%, C 群は 40.1 %であり，6 年生は, A 群 37.3%, B 群 32.9%, C 群 46.2%の正解率だった。これらの結果から，読み方によるリスニングテストに差は現れず，リーディングでは「なぞり読み」群が 5，6 年生ともに正解率が高かった。これは高学年には文字を目にしていることで，それが自然に読める様になることを示唆しているのではないだろうか。しかしながら，楽しさの面では，5 年生は「読み合い」，6 年生では「読み聞かせ」が最も高い。5 年生はコミュニケーション活動に楽しさを感じているが，6 年生では，じっくりと英語を聞いて鑑賞し内容を理解することに楽しさを感じているようである。さらに，自由記述では，「もう少し難しい本も読んでみたい」「一人で読んでみたい」という記述もあり，絵本活動には肯定的であった。

(3)英語絵本の類型化と運用

小学校外国語活動の中で，絵本を効果的に活用するためには，選本から活用法にまで注意を払う必要がある。以下に絵本導入の際の注意点をまとめる。

①絵本の選本：

絵や音声で内容が推測しやすいもの，音読して繰り返しやリズムが心地よいものを選ぶ。また，外国の文化や生活を扱った絵本を用いて広い世界に目を向けるきっかけを与える。使用絵本には既習の単語や表現を半分ほど含むことで，児童に安心感を与え，内容の推測，理解を容易にする。

②絵本の提示：

クラス全体に見えるように，大型絵本，または書画カメラやスキャナーで取り込んでスクリーンに映し出し，児童全員が一体となって絵本の世界を共有できるようにする。毎回の活動の一部として同じ絵本を繰り返し使うことで，自然な表現が無理なく身につく。

③絵本の指導法：

最初は教員または CD による「読み聞かせ」，慣れてきたら全体で声に出して「読み合い」をする。これにより，コミュニケーション活動の一環ともなり得る。次に，グループやペアで，感情のこもった読み方をするように促す。最後に，「なぞり読み」をさせ，「美しい音声で，理解しながら気持ちを込めて読めた」という達成感を与える。

絵本を英語活動に導入する場合，学習段階や学習内容に合った絵本を選び，低学年では英語の自然なリズムや表現を音声中心に「読み聞かせ」，中学年では感情をこめて全員で音声中心に「読み合い」，高学年では「音声・

意味・文字」を同時に提示しながら「なぞり読み」をする。そして，小学校からのトップダウン方式による無理のない文字への気づきの導入を経て，中学校１年生の「読む」ことへの抵抗を減らすことができると考える。小学校からの継続的な絵本活用に自然と無理なく読むことの素地を作り，中学校の英語学習に円滑に繋げていくことが，中学生の英語への前向きな動機付けとなることを期待し，将来的に低学年から段階的にできる「絵本」の指導法を提案する（畑江，2012）（表２）。

表２　学習段階における絵本の指導法

学習段階	指導内容	指導目標
低学年 ↓	読み聞かせ	音声や絵によって推測しながら内容を理解できる
中学年 ↓	読み合い	内容を理解しながら感情のこもった英語で表現できる
高学年 ↓	なぞり読み	音声・内容・文字を結びつけながら音読できる。
中１	一人読み	内容を理解しながら音読・黙読することができる。

【引用文献】

大島英美（2011)『声に出して読む英語絵本 初めてのリードアラウド』中央公論新社
太田光春（2012）「英語教育全体における小学校外国語活動の役割」岡秀夫・金森強（編著)『小学校外国語活動の進め方「ことばの教育として」』成美堂
佐藤久美子・佐藤綾乃（2009)「L2 小学生の英語絵本の理解過程と読解ストラテジー」『小学校英語教育学会紀要』第 10 号, 43-48.
外山節子（監修・著）（2010)『小学校の外国語活動で成果を上げる指導案付き英語の絵本活用マニュアル』コスモピア
畑江美佳（2012)「小学校外国語活動における「読む」ことへの第一歩としての絵本の活用」『融合文化研究』第 18 号，2-13.

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 9 件）

1. 畑江美佳，小学校外国語活動における「読む」ことへの第一歩としての絵本の活用， 融合文化研究第 18 号，2-13, 2012，査読有
2. 畑江美佳，小学校外国語活動における「英語絵本」の活用－コミュニケーション能力の素地を育むために－，四国英語教育学会紀要第 32 号, 12-28, 2012，査読有
3. 石濵博之，英語活動における「話すこと」の効果に関する実践的研究－どのくらい児童は既習した言語項目を表現できるか－，上越教育大学研究紀要 32 巻，227-238, 2012，査読有
4. 石濵博之，小学校の『外国語活動』の実施上の課題って何なの？,『教育の最新事情がよくわかる本 2』教育開発研究所（編)，教育開発研究所，2012，査読有
5. 石濵博之，渡邊陽介，外国語活動に「お寿司屋さんごっこ」を導入した授業の展開とその効果－「ごっこ遊び」で扱った寿司英語とあつかわなかった寿司英語の学習成果に焦点をあてて－, 小学校英語教育学会紀要第 13 号，52-67, 2012，査読有
6. 與那嶺尚弘，野口健太郎，佐藤淳，スキルの可視化を目指したネットワーク型試験システムの開発，日本 e-Learning 学会会誌 Vol.12，2012，査読有
7. 畑江美佳,「聞く」「読む」技能の初期導入に関する研究－小学校高学年からの英語を「読む」技能への素地作り－，日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 12 号，31-40, 2011，査読無
8. 畑江美佳，英語を「読む」技能習得のための小・中連携－小学校からできる文字指導，中学校へ繋げる文字指導－，日本大学大学院総合社会情報研究科紀要 12 号，121-132, 2011，査読無
9. 石濵博之，小学校における 35 時間の『英語活動』が中学校 2 年生の聴解力に及ぼす効果，石濵博之，中部地区英語教育学会第 39 号，119-126, 2010，査読有

〔学会発表〕（計 7 件）

1. 石濵博之，小学校外国語活動にいたる背景，外国語活動の内容と成果，及び課題－外国語活動の授業に焦点をあてて－，日本メディア英語学会，2012 年 8 月 4 日，愛知淑徳大学星が丘キャンパス（愛知県）
2. 畑江美佳，小・中英語カリキュラム接続に関する一考察－「読む」技能に焦点を当てて－，鳴門教育大学鳴門英語教育学会，2012 年 7 月 29 日，鳴門教育大学（徳島県）
3. 畑江美佳，小学校高学年における「英語絵本」の活用－「読む」技能の素地作りとして－, 国際融合文化学会, 2012 年 7 月 1 日，龍谷大学セミナーハウス（京都府）
4. 畑江美佳，複合的コミュニケーション能力を育む英語絵本の活用，四国英語教育学会, 2012 年 6 月 24 日，高知大学朝倉キャンパス（高知県）
5. 今野拓保，佐藤淳，クラウドに対応した電子絵本の開発，高専シンポジウム in 熊本，2012 年 1 月 28 日，熊本市国際交流会館（熊本県）
6. 畑江美佳，小学校外国語活動における「英語絵本」活用の教育的効果－コミュニケーション能力の素地を養うための活用法，国際融合文化学会，2011 年 6 月 12 日，龍谷大学セ

ミナーハウス（京都府）
7. 畑江美佳,「音声」「絵」「文字」を連動させた小学校用英語単語ソフトの開発と実践, 小学校英語教育学会, 2010 年 7 月 18 日, 北海道工業大学（北海道）

６．研究組織
(1)研究代表者
畑江　美佳（HATAE MIKA）
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号：20421357

(2)研究分担者
石濵　博之（ISHIHAMA HIROYUKI）
上越教育大学・学校教育研究科（研究院）・准教授
研究者番号：00223016

佐藤　淳（SATO JUN）
鶴岡工業高等専門学校・電気電子工学科・教授
研究者番号：10235351